

1-1

「琵琶湖」という呼称

「琵琶湖」という名前の由来は、14世紀初頭の文献に書かれたことから始まります。それまでは、「近淡水」「近江の海」、「鳩の海」などと呼ばれていました。名前は湖上に浮かぶ竹生島にまつられている弁才天がもつ楽器の琵琶が湖の形状に似ていることから来します。

1. 「琵琶湖」という呼称のはじまり

「琵琶湖」という名前の由来は14世紀の初頭、比叡山延暦寺の学僧光宗(1274年～1347年)が記した文献『溪嵐拾葉集』に「琵琶の形に似たり」と表記されたことにはじまります。

それまでの琵琶湖は、奈良の都から遠く離れた淡水の湖を遠江と呼び、それに比べて近い淡水の湖という意味を込めて「近淡水」または「近江の海」と呼ばれていました。他にも淡海、水海、細波の海、水鳥の名前を借りて「鳩の海」などと表記されてきました。

現代でこそ、航空写真や衛星写真、Google mapなどで、正確な湖の全容を眺めることが可能ですが、光宗が活躍した室町時代の初めに、果たして和楽器の琵琶の形に見えたのでしょうか。この単純な疑問から出発して、琵琶湖の呼称という民俗文化を探究した人物がいます。木村至宏氏(1935年生まれ・成安造形大学名誉教授、附属近江学研究所顧問)です。

2. 竹生島の弁才天像

木村氏は、まず、和楽器の琵琶と
いえば、琵琶湖の守護神として古代



けんぽんちゃくしよくべんざいてんぞう
写真 1-1-1 絹本着色弁才天像(宝厳寺蔵)



から信仰の対象となってきた竹生島の弁才天に注目しました。竹生島宝厳寺には、「絹本着色弁才天像」という絵画の宝物がありますが、そこに大きな和楽器の琵琶が描かれています。弁才天とは、元来、インドのヒンドゥー教に登場するサラスバティーという女神で、弁才天の他、妙音天、美音天などと漢訳され、芸能や水、仏法を守護する神として、インドから中国を渡って日本の奈良時代に入ってきました。724(神亀元)年、聖武天皇(710年～756年)は、夢枕に立った天照皇大神の宣告に従い、僧行基に命じて竹生島に堂舎を建立し、弁才天を祀りました。

平安時代に入り、最澄(766年～822年)が比叡山に一乗止観院(後の根本中堂)を建立したとき、堂舎の乾(北西)の方角に大弁才天女が現れ、「私は湖上に浮かぶ霊島(竹生島)に住んで、比叡山の仏法を守護すると誓った」といいます。以後、竹生島は比叡山天台僧の聖地となり、島主である弁才天は、比叡山の仏法を守護するという関係ができあがりました。後白河法皇が平安時代末期に編集した歌謡集『梁塵秘抄』に、「淡海の湖は海ならず 天台薬師の池ぞかし 何ぞの海 常楽我浄の風吹かば 七宝蓮華の波ぞ立つ」という一首があり、まさに琵琶湖は全体は単なる湖ではなく、天台宗という仏法に基づいた池であり、慈悲に満ちた清浄な風が吹き、静かな波は美しい蓮の花であると例えられたのです。

3. 琵琶との関係

木村氏は、天台僧の光宗が、比叡山で修行を積み、当然『梁塵秘抄』の一首も見聞していたと想像でき、『溪嵐拾葉集』の中で、この湖は弁才天が住む浄土であると記しましたが、それは天台宗の浄土と同義語と解釈できます。そして光宗は修行の中で、近江の山々を闊歩し、さまざまな角度から湖を眺め、常に守護神である弁才天をイメージしていたからこそ、湖の一部を見て全体を見るという観想を行い、湖の形が弁才天の琵琶の形に見えたのではないかと推測できると木村氏は結論づけました。

加えて、世界に琵琶湖のような楽器の名前を呼称とした湖がないかと調査し、イスラエルにキンノールという立琴の名前を語源としたキネレット湖という存在を確認しました。

この湖は別名ガラリヤ湖と言い、聖書によると、湖が眼下に見える丘の上でイエスが熱心に布教活動を行い、さまざまな伝説をのちに伝えたと言われます。滋賀県を中心にキリスト教伝道師として活躍したウィリアム・メレル・ヴォーリズ(1880年～1964年)が琵琶湖周辺で「ガラリヤ丸」という船に乗って布教活動をしたことはよく知られ、その船名は、ガラリヤ湖に由来していることは言うまでもありません。洋の東西を問わず、命を育む真水を満々と湛^{たな}える湖は、清浄なる聖地を創造し、細波の音は浄土や天国に奏でる楽器の音色と重なります。

「琵琶湖」という呼称は、古代から連綿と繋がってきた信仰に由来し、周辺に暮らす人々の心の拠り所となって今も愛され続けているのです。